

2014年度新入生意識調査から見た新入生の特徴と入学後成績の関係

神林 博史

1. 目的

本学では入学時に実施される「新入生意識調査」と、卒業時に実施される「卒業生意識調査」によって、入学から卒業に至る学生の変化や教育の成果を把握しようと試みてきた。しかし従来の新入生意識調査と卒業生意識調査には、学生番号のように個々の学生を同定するための情報が存在しなかった。言い換えると、それぞれの調査データはクロスセクションデータとして収集されてきた。このため同一集団を追跡調査したデータであるにも関わらず、データから得られる情報はかなり限定的であった（神林 2014a）。

教育研究所の提案により2014年度からこの方針が改められ、新入生意識調査において学生番号を任意で回答してもらうことになった。これによって新入生意識調査を起点とするパネルデータを構築することが可能になり、在学時の成績・就学状況（たとえば退学や留年の有無）・卒業時の意識など様々な情報を縦断的に分析することができる。このデータから得られる知見がいかなるものになるか、その全容が明らかになるのは2014年度入学生が卒業する2017年度の卒業生意識調査の完了を待たなければならない。とはいえ、入学後の学業成績についてはすでに新入生意識調査との対応づけが可能になっている。

本稿の目的は2つある。第一に、2014年度から新たに導入された質問項目の回答傾向について基礎的な検討を行う。第二に、一つの試みとして、新入生意識調査データと1年時前期の成績データを連結したパネルデータを用いて、どのような学生が成績不振に陥りやすいのかについての分析を行う。

2. 2014年度新入生調査の質問項目の特徴

上述のように、2014年度の新入生意識調査では、任意で学生番号の記入を求める質問が追加された¹。また、入学後の成績や大学生活の適応への影響を調べるために、高校時の学習

¹ 学生番号の記入については、調査票の冒頭に以下の説明文を配置して、質問の意図と記入への協力を求めている。「最後にみなさんの学生番号を書いてもらう欄があります。これはみなさんの入学時の態度や考え方がその後の大学生活とどのように結びついているかを、学業生活や学生生活に関する資料とあわせて総合的に調べるために必要です。しかし学生番号を記入するかどうかはみなさんの判断にゆだねられており、書かなくともかまいません。学生番号を書いても書かなくともみなさんの不利益になることはありません。学生番号を書いていただいた場合には、個人情報としていっそう厳重に管理されますので、プライバシーはきちんと保護されます。

習慣と入学時の不安感に関する項目が新たに導入されている（このため2013年度まで質問されていた一部の項目が削除された）。2013年度と2014年度の質問内容の異同を表1にまとめた。

表1 2013年度および2014年度新入生調査の質問内容の異同

質問項目	回答形式	2013年度	2014年度
1. 性別	単一選択	○	○
2. 入試方式	単一選択	○	○
3. 卒業年	単一選択	○	○
4. 出身高校所在地	単一選択	○	○
5. 自宅か否か	単一選択	○	○
6. 出身高校の進学校度	単一選択	○	○
7. 高校生活で特に力を入れたこと ¹⁾	多項選択(2つまで)	○	○
8. 受験のための平均学習時間	単一選択	×	○
9. 去年の読書量	単一選択	×	○
10. 高校時代に学習していない科目	多項選択	○	○
11. 受験を決めた時期	単一選択	○	○
12. センター試験受験の有無	単一選択	○	○
13. 受験決定の際の情報収集	単一選択	○	○
14. オープンキャンパスへの参加	単一選択	○	○
15. 受験の際に役に立った情報源	多項選択	○	○
16. 進学について相談した相手	多項選択	○	○
17. 本学の情報を見たメディア	多項選択	○	○
18. 本学を受験した理由	多項選択	○	○
19. 入学学科を受験した理由 ²⁾	多項選択(2つまで)	○	○
20. 併願校(第二志望まで)	単一選択+自由記述	○	○
21. 入学学科への入学満足度	単一選択	○	○
22. 大学生活で特に力を入れたいこと	多項選択(2つまで)	○	○
23. 大学でできると思う勉強	多項選択(2つまで)	○	×
24. 大学生活についての不安	多項選択(2つまで)	○	×
25. 大学生活についての不安(5項目) ³⁾	単一選択	×	○
26. 卒業後の進路についての考え	単一選択	○	○
27. 仕事を決める上で重視すること	多項選択(2つまで)	○	×
28. 人生を送る上で重視すること	多項選択(2つまで)	○	×
29. 東北学院大学のイメージ	自由選択	○	×
30. 学生番号(任意)	番号記入	×	○

注1) 2014年度では、一部項目のワーディングが微修正されている。注2) 学科によって選択肢の内容および数が異なる。

注3) ①大学の勉強についていけるか、②親しい友人ができるか、③希望する就職・進学ができるか、④経済的にやっていけるか、⑤充実した大学生活を送れるか、の5項目。

以下では、新規に導入した項目の基礎的な分析を行い、その後に新入生意識調査で得られた情報をもとに、1年時前期の成績不振（単位取得不振）の規定因を検討する。

3. 新規項目の分析

3.1 高校3年時の学習習慣：受験勉強時間と読書量

いわゆる「ゆとり教育」の導入以降、大学生の学力低下に関する議論が喧しい。このことと関連して、大学教育の質保証を求める動きも活発化している。大学教育において確かな学力を育てる上で、学生の学習習慣が重要な役割をはたすことは改めて指摘するまでもないだろう。そして学習習慣は基礎体力と同じで一朝一夕に獲得できるものではなく、大学入学前からの習慣が大きく影響する。したがって、本学に入学してくる学生がどの程度の学習習慣を身につけているかを知ることは、教育指導を行う上で重要な基礎情報となる。

以上の問題意識に基づいて、2014年度の新入生調査では、学生の大学入学前の学習習慣の実態を把握するために、(1) 高校3年時の1日あたりの平均受験勉強時間（以下「受験勉強時間」と略）と、(2) 高校3年時の1カ月あたりの平均読書冊数（以下「読書量」と略）、の2つを質問している。（厳密には、これらの質問では「去年」のことを尋ねているので、受験浪人を経験した学生の場合は浪人時の学習習慣になる点に注意されたい。）

まず、受験勉強時間から検討しよう。受験勉強時間は「あなたは去年、大学受験のために一日平均どれくらい勉強しましたか」という質問で測定される。選択肢は、「ほとんどしなかった」「1時間以内」「1時間～2時間」「2時間～3時間」「3時間以上」の5択である。回答の分布をまとめたものを表2に示す。

表2 高3時の1日あたり平均受験勉強時間

	%	N
ほとんどしなかった	17.8	489
1時間以内	12.3	337
1時間～2時間	19.8	544
2時間～3時間	17.1	470
3時間以上	32.6	895
DK	.5	13
合計	100.0	2748

大学における学習を考える上で注目すべきは「ほとんどしなかった」であるが、回答比率は17.8%となっている。2011年に仙台圏の高校生（いわゆる「進路多様校」の生徒のみ）を対象とした調査では、高校3年の夏ごろ（8月～10月）の学校外での勉強時間が「0分」で

あった生徒の比率は約40%（平日勉強時間0分が43.9%、週末勉強時間0分が41.2%）であった（神林2014b）。これに比べれば受験勉強を行う比率は高いと言える。

とはいえ、表2は全ての新入生の結果である。受験勉強時間については、出身高校のタイプや入試方法の影響が大きいと予想できる。そこで、学生の出身高校のタイプ（生徒の進学率による4分類²）と学習時間の関係を分析したものが表3である。なお、新入生調査は全数調査なので統計的検定を行う必要性は低いのだが、学校タイプ間に学習時間の分布の差があると言えるのかの参考としてカイ二乗検定を行った。

表3 出身高校タイプ別受験勉強時間

数値：%

	ほとんど しなかった	1時間以内	1時間～ 2時間	2時間～ 3時間	3時間以上	N
進学校	14.5	9.2	14.7	17.2	44.4	1076
準進学校	14.7	11.5	22.9	19.9	30.9	998
準非進学校	24.1	18.3	25.8	14.2	17.6	431
非進学校	37.4	18.9	21.4	9.7	12.6	206
全体	17.9	12.2	20.0	17.2	32.8	2711

注) 出身高校タイプが「非該当」のケース（高卒認定等）は分析から除外した。 $\chi^2=236.566$, $df=12$, $p<.001$

自明の結果ではあるが、進学校の生徒ほど受験勉強に費やす時間が長い。先述の仙台圏の高校生調査の対象校は、表3で言えば「準進学校」か「準非進学校」に相当するが、それと比べても勉強を行わない学生の比率は低くなっていることがわかる。

次に、入試方法³と受験勉強時間の関係をまとめたものが表4である。「ほとんどしなかった」の比率が最も高いのはTG推薦、次いでスポーツ推薦となっており、これら2つの入試方法の場合、学生の半数以上が受験勉強をしていない。一方、一般入試とセンター入試利用者では「ほとんどしなかった」の比率は5%を下回っており、入試方法による差が大きいことがわかる。

² 高校種別の質問文は「あなたが卒業した高校は？」。選択肢は「1. 進学校だった（4年制大学志望者がほとんど）」「2. どちらかといえば、進学校だった（4年制大学志望者が半分以上）」「3. どちらかといえば、進学校ではなかった（4年制大学志望者が半分以下）」「4. 進学校ではなかった（4年制大学志望者はほとんどいない）」「非該当」の5カテゴリー。以下では1を「進学校」、2を「準進学校」、3を「準非進学校」、4「非進学校」と呼ぶ。「非該当」はケース数が少ないため分析から除外した（これ以降の分析も同様）。

³ 新入生意識調査における入試方法の選択肢は、(1) AO、(2) 学業推薦、(3) 資格取得推薦、(4) キリスト者等推薦、(5) スポーツ推薦、(6) 文化活動推薦、(7) TG推薦、(8) 帰国生特別、(9) 社会人特別、(10) 外国人留学生特別、(11) 一般：前期、(12) 一般：後期、(13) センター試験：前期、(14) センター試験：後期、の14種。ここでは入学者数が比較的少ない(3)(4)(6)(8)(9)(10)を「その他推薦等」に統合した。また、一般入試とセンター試験はそれぞれ前期・後期を統合した。また、DKは分析から除外した。

表4 入試方法別受験勉強時間

数値：%

	ほとんど しなかった	1時間以内	1時間～ 2時間	2時間～ 3時間	3時間以上	N
AO入試	24.7	18.7	29.7	18.0	8.9	417
学業推薦	24.9	20.1	30.7	15.2	9.1	671
スポーツ推薦	50.4	21.5	20.7	5.8	1.7	121
TG推薦	52.9	29.4	12.8	3.7	1.1	187
その他推薦等	21.2	7.6	22.7	9.1	39.4	66
一般入試	3.3	2.8	12.1	22.4	59.3	989
センター試験	4.2	3.5	10.6	18.0	63.7	284
全体	17.9	12.3	19.9	17.2	32.7	2735

 $\chi^2=1300.453, df=24, p<.001$

次に読書量について検討しよう。改めて述べるまでもなく、読書は大学での学習活動において非常に重要な役割をはたす。それゆえ、本学でもいくつかの学科はAO入試における重要評価点として読書経験を採用している。

読書量は「あなたは去年、ふだんどのくらい本を読みましたか（教科書・参考書・雑誌・コミックは除く）」という質問で測定される。選択肢は「ほとんど読まなかった」「1カ月に1冊くらい」「1カ月に2冊くらい」「1カ月に3冊以上」の4択である。回答の分布をまとめたものを表5に示す。

表5 高3時の平均読書量

	%	N
ほとんど読まなかった	54.8	1505
1カ月に1冊くらい	25.7	705
1カ月に2冊くらい	10.9	300
1カ月に3冊以上	8.2	226
DK	.4	12
合計	100.0	2748

受験勉強時間と同様に、出身高校タイプおよび入試方法との関係を分析してみよう。表6は高校タイプと読書量の関係を分析したものである。

表6 高校タイプ別平均読書量

数値：%

	ほとんど 読まなかった	1カ月に 1冊くらい	1カ月に 2冊くらい	1カ月に 3冊以上	N
進学校	58.4	23.0	10.2	8.4	1075
準進学校	55.0	26.6	10.9	7.5	1000
準非進学校	52.0	28.3	12.8	7.0	431
非進学校	45.6	31.1	10.7	12.6	206
全体	55.2	25.8	10.9	8.1	2712

 $\chi^2=21.300, .df.=9, p<.05$

進学校ほど「ほとんど読まなかった」の比率が高くなるのがわかる。これは表3の受験勉強時間の裏返しで、読書よりも受験勉強を優先した結果と考えるべきだろう。

次に、入試方法と読書量の関係を表7に示す。

表7 入試方法別平均読書量

数値：%

	ほとんど 読まなかった	1カ月に 1冊くらい	1カ月に 2冊くらい	1カ月に 3冊以上	N
AO入試	46.5	30.3	14.1	9.1	419
学業推薦	48.9	31.6	11.9	7.6	671
スポーツ推薦	62.8	26.4	5.8	5.0	121
TG推薦	49.7	28.3	11.2	10.7	187
その他の推薦	53.0	25.8	13.6	7.6	66
一般入試	61.7	20.8	9.6	7.9	989
センター試験	59.4	20.5	10.2	9.9	283
全体	55.0	25.8	11.0	8.3	2736

 $\chi^2=60.680, .df.=18, p<.001$

入試方法別にみた場合、「ほとんど読まない」が多いのはスポーツ推薦、一般入試、センター入試である。このうち一般入試とセンター入試は、表3からわかるように受験勉強時間が長いことの裏返しになっていると考えられる。

ところで先述のように、本学ではAO入試の重要評価点に読書経験を挙げている学科がいくつか存在する。2014年度新入生の場合、文学部英文学科（昼・夜）、文学部歴史学科、法学部法律学科、教養学部人間科学科がこれに相当する。AO入試で入学した学生について、読書経験を重要評価点とした学科とそうでない学科を比較すれば、前者の読書量が多くなる

と予想できる。もしそうでない場合、AO入試が有効に機能していないことになる。その意味で、新入生意識調査データからAO入試の有効性（あくまでも読書経験についてのみだが）を検証することができる。

表8はケースをAO入試で入学した学生のみ限定し、読書経験を重要評価点とする学科とそうでない学科に分けた上で読書量を比較した結果である。

表8 AO入試で読書を重視する学科のAO入学生の読書量

数値：%

	ほとんど 読まなかった	1カ月に 1冊くらい	1カ月に 2冊くらい	1カ月に 3冊以上	N
読書重視学科の AO入学者	31.4	39.0	17.1	12.4	105
それ以外の学科の AO入学者	51.6	27.4	13.1	8.0	314
全体	46.5	30.3	14.1	9.1	419

$\chi^2=13.030$, $df=3$, $p<.01$

読書経験を重要評価点とする学科は、そうでない学科よりも「ほとんど読まなかった」が20ポイント低く、全体的に読書量が多いことがわかる。したがって読書重視のAO入試はある程度有効に機能していると言える。とはいえ、読書経験を重視する学科においてもなお3割の学生が「ほとんど読まなかった」と回答しており、スクリーニングが十分かどうかについては見解が分かれるだろう。

3.2 入学時の不安感

2013年度の新入生意識調査では、入学時の不安感を複数選択（7項目中2項目までを選択）で質問していた。2014年調査ではこの形式を改め、2013年度までの調査で選択される比率の高かった項目および学生の状況を把握する上で重要と考えられる5つの不安感について、単一選択を行う質問に変更された。これは、学生の不安感をより詳細に把握し、入学後の大学生活への適応との関係を分析することを企図したものである。

不安感は「あなたは、大学入学後のことについて、次のような不安を感じていますか」という質問文で、次の5つの事柄について測定される。(1) 大学の勉強についていけるか、(2) 親しい友人ができるか、(3) 希望する就職・進学ができるか、(4) 経済的にやっていけるか、(5) 充実した大学生活を送れるか。選択肢は「不安である」「やや不安である」「あまり不安はない」「不安はない」の4択である。回答の分布を表9に示す。

表9 不安感の分布

数値：%

	勉強について いけるか	親しい友人が できるか	希望の就職・ 進学できるか	経済的にやっ ていけるか	充実した大学生 活が送れるか
不安である	47.3	31.8	52.3	23.4	26.5
やや不安である	37.5	39.0	37.3	38.3	43.0
あまり不安はない	10.0	20.3	6.7	27.4	22.6
不安ではない	4.4	7.9	2.5	10.0	6.5
DK	.8	.9	1.2	1.0	1.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N			2748		

「不安である」と「やや不安である」を合計した場合、全ての項目で「不安」が5割を超えている。不安感が最も高いのが「希望の就職・進学ができるか」の9割、最も不安感が低いのが「経済的にやっていけるか」の6割である。経済的不安を抱える学生が半数以上を占めるという事実は特に深刻に受け止めるべきだろう。

3.3 学生番号の回答状況

第1節で述べたように、2014年度の新入生調査では任意の協力という形で学生に学生番号の記入を求めている。この学生番号回答率を学科別にまとめたものが表10である。

学生番号の回答率は全体で50.9%となっており、ほぼ半数の学生が学生番号を回答していることになる。回答率は学科によって異なるが、概ね50%前後の水準にある。ただし、教養学部言語文化学科は例外で、回答率が29%と他学科に比べて極端に低い。この低回答率の原因は不明だが、調査実施時の指示に何らかの問題があったのかもしれない。

なお、どのような学生が学生番号の回

表10 学科別学生番号回答率

学部	学科	回答率(%)	%の基数
文学部	総合人文	53.1	32
	英文昼	47.5	221
	英文夜	55.0	20
	歴史	52.4	187
経済学部	経済	55.9	478
	共生社会	49.5	198
経営学部	経営	52.3	344
法律学部	法律	50.5	333
教養学部	人間科学	46.9	113
	言語文化	29.0	107
	情報科学	43.7	103
	地域構想	51.8	112
工学部	機械知能	48.2	141
	電気情報	42.2	135
	電子工学	60.4	111
	環境建設	68.1	113
全体		50.9	2748

答に協力したのかについての詳細な分析を行った結果、(1) 男子よりは女子、(2) 入学満足度が高い学生、が学生番号の回答に協力する傾向があることが明らかになった（詳細な分析結果は略）。ただし、これらの変数と回答率の関連は弱く、全体的には学生番号を回答する学生とそうでない学生に顕著な偏りは存在しないことが確認された。

3.4 前期の単位取得不振と新入生の特徴の関係

新入生調査で回答してもらった学生番号を入学後の成績データと対応させることで、新入生の特性と入学後の学業成績の関係を分析することができる。ここでは、学生の指導上特に問題となる成績不振の原因について検討してみよう。

本学のように分野の異なる様々な学科が存在する場合、学生の成績を一律に比較することは難しい。本稿では比較の容易さの観点から、単位取得状況に注目する。取得単位が多いことは成績が優れていることを必ずしも意味しないが、成績が悪かったり勉学態度に問題がある場合、取得単位数は少なくなる。したがって、単位が少ないことは成績不振の指標として有効である。本稿執筆の段階で入手可能なのは1年時前期の成績なので、ここでは前期取得

表 11 学科別単位取得状況

学部	学科	平均 取得単位	標準偏差	最小値	最大値	15単位 以下(%)	N
文学部	総合人文	21.5	4.4	10	28	5.9	17
	英文昼	20.8	4.4	0	28	5.7	105
	英文夜	20.0	1.3	18	22	0.0	11
	歴史	19.7	4.4	8	28	13.3	98
経済学部	経済	17.4	4.5	0	30	22.5	267
	共生社会	19.6	3.6	10	26	13.3	98
経営学部	経営	19.2	3.9	0	26	11.7	180
法律学部	法律	19.6	4.2	0	27	11.3	168
教養学部	人間科学	22.2	5.1	6	29	9.4	53
	言語文化	19.8	6.7	0	26	19.4	31
	情報科学	24.0	6.1	0	38	4.4	45
	地域構想	22.1	3.2	16	30	0.0	58
工学部	機械知能	20.6	3.1	10	25	5.9	68
	電気情報	25.3	2.2	18	32	0.0	57
	電子工学	23.3	3.2	13	29	1.5	67
	環境建設	17.9	3.6	3	23	18.2	77
全体		20.0	4.6	0	38	12.0	1400

注) 学生番号を回答した学生のみ結果

単位数が15単位以下だった学生を「単位取得不振者」と呼び、成績不振とみなす。15単位以下を成績不振と定義することについては、(1) 全学の1年前期の平均取得単位数は20、標準偏差は4.6なので、15単位以下は「平均-1標準偏差」(偏差値40以下)に相当する、(2) 人間科学科では2014年度新入生に対しこの基準で個別履修指導を行った、という事実を鑑みてそう不自然な基準ではないと考えられる。

では、単位取得不振者はどれくらい存在するのだろうか。学科別の単位取得状況を表11にまとめた。なお、この結果は新入生調査において学生番号を回答した学生のみのものであり、各学科の全学生の成績ではないことに注意が必要である。

先述のように、全学の平均取得単位数は20(標準偏差4.6)、単位取得不振者(15単位以下)比率は12%となっている。いくつかの学科では単位取得不振者の比率が0%になっているが、上述のようにこの結果は学生番号を記入した学生のみのもので、実際には各学科とも単位取得不振者は存在する。

学科別に見た場合、最も単位取得不振者率が高いのは経済学部経済学科で、教養学部言語文化学科がそれに次ぐ。ただし、取得単位数は各学科のカリキュラムや指導方針の影響を受けるので、学科によっては取得単位数が15単位以下であることがただちに成績不振であることを意味しない可能性もある。また、言語文化学科に関しては、すでに確認したように学生番号の回答率が極端に低いという問題が存在するので、そのことと何らかの関係があるのかもしれない。

では、取得単位不振に陥るのはどのような学生なのだろうか。このことを明らかにするために、単位取得不振者であるか否かを従属変数とするロジスティック回帰分析を行う。

従属変数は単位取得不振者で、前期取得単位数が15単位以下の場合=1、16単位以上の場合=0の2値にコードする。

独立変数は以下の通りである。(1) 性別：男子=0、女子=1のダミー変数。(2) 所属学部：文学部を基準カテゴリーとするダミー変数。表11から明らかなように、学科を単位とすると標本数の少ないグループが生じるため学部を単位とする。(3) 入試方法：一般入試を基準カテゴリーとするダミー変数。カテゴリー区分は表4と同じ。(4) 高校種別：非進学校を基準カテゴリーとするダミー変数。カテゴリー区分は表3と同じ。(5) 不安感：5項目の不安感を個別に投入する。「不安である」「やや不安である」を1、「あまり不安ではない」「不安ではない」を0とするダミー変数。(6) 高校3年時の学習習慣：受験勉強時間と読書習慣の2つの変数を用いる。前者は「ほとんどしなかった」を1、それ以外の選択肢を0とするダミー変数、後者は「ほとんど読まなかった」を1、それ以外の選択肢を0とするダミー変数として扱う。(7) 入学時の不満：入学不満感と不本意入学の2種の変数を用いる。前者は所属学科

の入学満足感を使用し、「たいへん満足している」「どちらかといえば満足している」を0、「どちらかといえば不満である」「たいへん不満である」を1とするダミー変数をして扱う。後者は神林（2014a）に準じ、入学学科が第一志望であったかの質問を用い、入学した学科が第一志望でなかった学生を「不本意入学」とみなし1、第一志望であった学生を0とするダミー変数として扱う。

分析の結果を表12に示す⁴。

表 12 単位取得不振の規定因（ロジスティック回帰分析）

		B	S.E.	OR	95% CI (LL, UL)
性別	女子	-.616**	.237	.540	.340, .859
学部(基準:文学部)	経済学部	.710*	.289	2.034	1.154, 3.584
	経営学部	.113	.351	1.119	.563, 2.227
	法学部	.127	.359	1.136	.562, 2.296
	教養学部	-.391	.386	.676	.317, 1.441
	工学部	-.622	.380	.537	.255, 1.130
入試方法(基準:一般入試)	AO入試	-.524	.317	.592	.318, 1.102
	学業推薦	-.530	.279	.588	.341, 1.016
	スポーツ推薦	.746*	.370	2.109	1.022, 4.351
	TG推薦	-.437	.413	.646	.288, 1.450
	その他の推薦	.105	.570	1.111	.363, 3.397
	センター試験	-.750	.427	.472	.205, 1.091
高校種別(基準:非進学校)	進学校	-.435	.341	.647	.332, 1.263
	準進学校	-.340	.310	.712	.388, 1.307
	準非進学校	-.401	.334	.670	.348, 1.288
不安感	勉強不安	-.240	.273	.786	.460, 1.344
	友人関係不安	-.020	.232	.981	.622, 1.546
	就職・進学不安	-.576*	.268	.562	.332, .951
	経済的不安	-.201	.187	.818	.567, 1.180
	大学生生活不安	-.070	.224	.932	.601, 1.445
高3時の学習習慣	受験勉強:ほとんどしなかった	.450	.242	1.569	.977, 2.521
	読書:ほとんど読まなかった	-.237	.182	.789	.552, 1.128
入学時の不満	入学不満感	-.045	.363	.956	.470, 1.947
	不本意入学	-.599*	.236	.549	.346, .872
	定数	-.282	.502	.755	

N=1363, -2LL= 888.494, Pseudo R²: Cox & Snell=.069, Nagelkerke=.134, ** p<.01, * p<.05
OR: Odds Ratio, CI: Confidence Interval, LL: Lower Limit, UL: Upper Limit

⁴ 3.3で述べたように、学生番号を回答した学生とそうでない学生の間には大きな偏りはないので、学生番号を回答した学生は、母集団（2014年度新入生全体）から無作為抽出した標本と（疑似的に）みなすことができる。（もちろん、厳密な意味では無作為抽出した標本ではない。）

ロジスティック回帰係数が有意な効果を持つのは、①性別（女子ダミー）、②スポーツ推薦、③就職・進学不安、④不本意入学、の4つである。性別の係数は負なので、女子の方が男子に比べて単位取得不振になりにくいことを意味する。スポーツ推薦の係数は正であり、係数Bを変換したオッズ比は2.1なので、スポーツ推薦で入学した学生は、一般入試で入学した学生に比べて2倍の確率で単位取得不振になりやすいことを意味する。スポーツ推薦で入学した学生には、勉学に関する丁寧なケアが必要であろう。就職・進学不安の係数は負である。このことは、就職・進学に不安がない学生ほど単位取得不振になりやすいことを意味する。この結果は一見すると奇妙だが、就職・進学不安を持つ学生が9割をこえることを考慮すると（表9）、不安を持つのがむしろ普通であるとも言える。したがって、就職・進学不安を持たない学生は、物事を過度に楽観的に考える傾向のある、もしくは危機感の足りない学生であり、その危機感のなさが単位取得不振に影響していると解釈できるかもしれない。もしこの解釈が正しいならば、学生指導を行う上で興味深い情報となるだろう⁵。最後に、不本意入学の係数は負で、不本意入学の学生は単位不振になりにくいことを意味する。不本意入学は本学よりもレベルの高い大学を第一志望としていた学力が優秀な学生に生じやすいので（神林2014a）、当然の結果と言えるだろう。

以上のように、新入生の特性が1年時前期の成績に影響していることが明らかになった。統計的に有意であった4つの変数の効果については、多くの教員が経験的に知っていたことかもしれない。しかし、それが具体的な数値として把握できたこと、それによって特に注意すべき学生の特徴が明らかになったこと（今回の場合はスポーツ推薦入学の学生および就職・進学不安の低い学生）の意義は小さくないと考えられる。

4. おわりに

本稿の分析はごく基本的なものであるが、新入生意識調査において学生番号を質問し、これをその後の成績データと対応づけることの有効性は確認できたと言えるだろう。今後も新たなデータを追加し分析を積み重ねていくことによって、入学時の学生の特徴がその後の学業成績や学生生活にどのような影響を与えるかを、より詳しく知ることができるはずである。

ただし、今回の調査データには、学生番号を回答してくれなかった学生（全学生の約半数）が分析から脱落するという重大な問題が存在する。分析者の立場から言えば、学生番号の回答率は100%となることが理想である。学生番号の記入を義務化すればこの問題はただちに

⁵ 変数のコードを逆転し、就職・進学の「不安がない」を1としたダミー変数を用いて分析すると、「不安がない」のオッズ比は1.8となる。すなわち、就職や進学の不安を感じていない学生は、不安を感じている学生に比べて1.8倍単位取得不振者になりやすい。

解決できるが、義務化のためには学内手続き的にいくつかのハードルをクリアする必要がある。また、学生番号回答の義務化が学生にとって望ましいことかどうかについても意見が分かれるところである。このことについては、教育研究所内にとどまらない全学的な検討と議論が必要であろう。

【謝辞】

成績データの入手および利用にあたっては、教育研究所所長の水谷修先生のご尽力をいただきました。記して感謝いたします。

参考文献

- 神林博史.2014a.「本学における不本意入学者の特徴：東北学院大学新入生意識調査の分析」『東北学院大学教育研究所報告集』14:15-25.
- .2014b.「進路多様校の高校生の学習意識と学習行動——高校生活3年間の変化を探る——」木村邦博（編）『変動期における高校生の社会的態度・スキルの形成——学校生活と社会に対する高校生の意識調査報告書——』東北大学教育文化研究会：61-78.